みんなの顔が見えるまち

人権シリーズ vol.23

「部落の歴史に学ぶ」

3月11日㈫アストくにさきで㈳部落解放・人権研究所から渡辺俊雄さんを招いて、部落史についての講演会が行われました。主に人権問題を担当する各方面の関係者約50人が受講し、熱心に聞き入っていました。

〈受講者の感想〉

わが国固有の人権問題に「同和問題」があります。昔から言い伝えられ、今も私たちの間に残っている同和問題に対する誤った認識を払拭し、部落差別を解消することで「一人ひとりが人間らしく幸せに生きるために侵すことのできない普遍の権利（基本的人権）」を確立しなければなりません。

しかし、「部落差別は過去の愚かな風習で、現在では存在しない。」「今の若い人たちには無関係だから学校で教えたり、講演会などで学習する必要はない。」「そっとしておけば自然に部落差別はなくなる。」など、このような考えを持っている人たちが一人でもいる限り部落差別はなくなりません。なぜなら「部落差別」は、政治的・作為的に、しかも強制的に長年培われてきた日本人の心の奥底深くに潜む、日本人独特の感性の中の穢れ意識・穢れ感覚であるからです。この「ケガレ」の問題は、日本民族の中の基本的人権に相反するものであり、これを排除するには理性（教育）でしか克服（意識改革）できないと思います。

▲講演する渡辺俊雄さん

標記の講演では、主として中世（鎌倉・室町・戦国時代）から近世（安土桃山・江戸時代）までの被差別部落の起源や状況、歴史など部落史の見直しの話が中心でした。

①従来ピラミッド型で言われている身分制度（武士、百姓・町人、被差別民）は、偏見がまかり通っていた江戸時代に突然差別される地域や人が登場したわけではない。近世身分制度が起源なら、明治の「解放令」で被差別身分制度は廃止され消滅したはずだが、なぜ残ったのか、その根っこは何か。

②中世の社会は様々な被差別民がいて、現在のような分類をされていたわけではない。単に穢れていると見なされていたわけではなく、同時に特別の能力や技術を持つ特殊な存在として畏怖の念でも見られていた。例えば、牛馬を屠畜し、皮をなめして様々な用途に利用可能な皮革を生産する技術を持った集団であった。屠畜はいつの時代でもどこにでもある行為で決して「残酷」なわけではないが、そう感じる社会の意識の方が問題である。

③また、戦国時代には需要が大きく大事な軍需物資であった皮革を生産する職人を「かわた」身分と呼んだ。中世の被差別民は江戸時代には立派な職人になり、身分制度が確立していったので、差別を作り出したことではない。歴史は連続して考えるべきであり、その層をなして「イマ」がある。その時々を「輪切る」のでは理解できない。

④近世では、身分を固定化するうえで大きな役割を果たしたのが、「宗門改め」という政策であった。キリシタンをあぶり出して改宗させる目的が、次第に民衆を支配・統制するようになり、身分制度が成立していった。その結果を記した帳面に「かわた」身分が残っている。後に「穢多」身分となる。

私たちは、部落問題を知らないことによって歴史をゆがめてきた面があります。そもそも部落の存在自体が、本当は私たちの社会がゆがんでいる結果です。だからそのゆがんだ社会から部落差別を見えなくしてしまえば、歴史像はゆがんだままになるでしょう。もし反対に部落差別に照らして全体の歴史をとらえるなら、歴史は全く違って見えてきます。その意味でこの講演を通して学習することによって日本の歴史を学習し直すことができました。つまり歴史は、差別の歴史であるけれども、それを克服する歴史でもあったこと、そしてこれから完全に差別をなくすヒントも過去の歴史に埋もれていることが分かりました。

近年、部落史研究の成果や明らかになってきた史実など、部落史の見直しが顕著となってきています。この続きは次回の講演に期待します。

国東市人権講師団
相部秀彦

ファシリテーター養成講座

受講者募集 最大30名まで

○5～8月の間、毎月1回程度開催
（午後2時～5時を予定）
＊申し込み締切は4月30日㈬

○問い合わせ
国東市生涯学習課人権・同和教育係
TEL 0978㉒2121　FAX 0978㉒4070